

【翻訳】

ジョン・ミルトン著『教育論』
——サミュエル・ハートリブ氏宛の書簡——
John Milton: *Of Education*
To Master Samuel Hartlib

稲用 茂夫 (教育福祉科学部)

【要旨】

英国17世紀の詩人として知られるジョン・ミルトン(1608—1674)が『教育論』として1664年6月5日に小論文(パンフレット)の形で発表した、当時の教育改革論である。冒頭でいきさつが述べられているように、いくらか年長の知人サミュエル・ハートリブ(?1600—1662)から文書化するように要請され、送られたものである。要請を受けたミルトンからはすぐに届けられたにもかかわらず、受け取ったはずのハートリブからは、いつになっても印刷公表されず、ミルトンのほうで自費出版したという事情のため、書簡形式となっている。

英語の歴史的研究においては初期近代英語の散文に分類される、この著作を現代日本語に翻訳するに際しては、当然のことながら、分かりやすい表現となるように心がけた。ただ、時間的空間的にも異なる場合の常として、訳文と訳注を行きつ戻りつしながら読み進めていく作業が必ずともなう。そうしたわずらわしさをできるだけ読者に与えないように、さらには訳文のみでも専門的な議論が可能となるように、翻訳文を示したつもりである。

【キーワード】

ジョン・ミルトン (John Milton), 英国 (England), 17世紀 (17th century),
教育論 (Of Education), 教育改革 (reforming of education),
サミュエル・ハートリブ (Samuel Hartlib)

【訳文】

教育論⁽¹⁾

サミュエル・ハートリブ様⁽²⁾

私は長らく確信しているのですが、いくらかでも記憶と模倣にふさわしいことを発言したり行なうためには、ただ神への愛と人間への愛のほかには、何らの意図にも考えにも動かされてはならないと思います。しかしながら、このたび教育改革について書くことには、(たとえそれが考えられる最も偉大かつ高貴な企画の一つであり、それを欠くとなればこの国が滅亡してしまうものであろうとも⁽³⁾)あなた様の熱心なおすすめと真剣なご要請によってということであれば、今のこの時期にはまだ取りかか

る気持ちにはなれませんでした。現在のところ私の頭は、ある別のことがら⁽⁴⁾の追求に半ば向いておりまして、こちらの知識と実践も、真理の拡大とより大きな円満さのある正直な生き方への大きな助けとなるに違いないと思っているからです。さらには、たとえ個人的な友情の掟に引かれたとしても、本来はあちこちに気持を分割したり、以前の計画を変更したりすべきではなかったのですが、それも、あなた様の意志と行動を拝見して、ある良き摂理によって遠い国から当地へつかわされ、この島国への大いなる利益をもたらす好機かつ刺激となる方⁽⁵⁾であるとの尊敬を抱くようになったからです。

それに、聞き及びますところ、あなたは、我々の間で最高の賢者の人たち、また最高の権威者の人たちと同じ名声を得ておられます。あなたが諸外国の学識者の方々と文通を保ち、また、当地ならびに海外のどちらにおいても、この件〔教育〕において格別なご苦勞とご精勵をなさってこられたことは申すまでもありません。これは、かく統べ給う神の御心による、あるいは特別の天与の素質（これも神の御業ですが）によるのいずれにせよ、ということです。

あなたほどに名声と尊敬を受けておられる方が、ご自分の洞察力をなくされて、この私などには不適で、とても荷の重過ぎる課題を強制されているとも考えられません。これは仰せのとおり、偶然にも知り合うに至った我々の会話を通じてご確信なされたことから、この点についての私へのご要請の件を、今すぐ必要であり、かつ神のお定めを実行するための良い機会⁽⁶⁾でもある今回よりも先延ばしにするべきではなく、良心においても先延ばしできまいとお考えになられて、切羽詰まって、ほとんど無理矢理に要請なされたのでありましょう。

それゆえ、神からの義務にせよ、人からの義務にせよ、あなたが私に課される義務を拒否はせず、長きにわたり語らぬまま私の胸中に暖めておりました、より良い教育、これまで実施されてきたものより、はるかに広い範囲と内容に及び、しかもはるかに短期間で、はるかに確実な成果をあげうる教育、についての考え⁽⁷⁾を、ご要請に応じて書くことに取りかかりましょう。短く⁽⁸⁾なるように努力いたします。それは、私が述べますことは、この国が緊急に必要なことであり、議論されるよりも、むしろ実行されるべきこと⁽⁹⁾であるからです。従って、古代の有名な著作家たちからこの点に関して私の得た恩恵を語ることは控えたいと思います。また、到底読み切れないほど多い現代の『入門』や『教授学』⁽¹⁰⁾などの書物が企図していることを調査する気もありません。ただし、宗教と社会の知識の研究に捧げつくした探究と瞑想の長い年月⁽¹¹⁾が花咲かせた、いわばその精華ともいべき私のいくつかの見解（それはまた、我々二人の語らいの際、あれほどにもあなたの意にかなった事でもありましたが）を受け入れてくださればと思い、ここにそれらをお示しいたします。

さて、学問の目的⁽¹²⁾は、神を再び正しく知ることができるようになることにより、我々の最初の親が犯した破滅を修復することであり、この知識から、神を愛し、神を模倣し⁽¹³⁾、できる限り神に近い存在となるために、我々の魂に真の徳をもたせることにより、それが天からの恩寵である信仰と結合して⁽¹⁴⁾、至高の完全性をつくることです。しかし、我々人間の理解力というものは、この肉体に

おいては知覚可能なものには基礎を置けませんし、また、目に見える、下級の被造物⁽¹⁵⁾を順序正しく研究することで得られるほど明確には、神や目に見えないものについての知識には到達できないのですから、これと同じ方法が、賢明なる教育においても必然的に用いられるべきなのです。しかも、どの国でもすべての分野の学問に十分な経験と伝統を与えるとは限らないので⁽¹⁶⁾、それゆえ、我々は、いかなるときにも智慧の追求に極めて熱心であった人々の言語を主として教わるのです。ですから、言語というものは、知って役に立つものを我々に伝えてくれる道具⁽¹⁷⁾に過ぎません。それに、たとえバベルの塔⁽¹⁸⁾で分断された世界の言語すべてに通じていると自負する言語学者がいるとしても、もしも、単語や辞書のみならず、その人がそれらの言語に含まれている本質を学んでいないのなら⁽¹⁹⁾、母国語だけで十分に賢明な自作農や商人ほどにも、学問のある人としては評価されないでしょう。

こういうことから、一般的には学問をまったく楽しくもなく、まったく不成功なものにしてきた多くの誤解が生じているのです。その第一に、たいへん哀れなラテン語、ギリシア語をどうにか身に付けるのに7、8年もかかっています⁽²⁰⁾。別の方法によれば、ほんの1年で⁽²¹⁾容易に楽しく習得できるのですが。こうした語学において上達の著しい妨げとなっているのは、一つには、学校と大学の両方で、あまりにしばしば、無駄な休暇が与えられて時間が失われている⁽²²⁾こと。また一つには、子どもたちの空っぽの頭に無理やりに作文、作詩、演説文を作らせるという本末転倒の要求⁽²³⁾を押しつけて時間が失われていることです。これらは、最も成熟した判断能力を必要とする活動であり、長年にわたる読書と観察とによって満たされた頭脳が、洗練された命題や内容豊富な発案⁽²⁴⁾を用いて行なう最終の仕上げの作業です。こういうものを、かわいそうな若者たちから、鼻から血を絞り出すとか、あるいは未熟な果実をもぎ取るかのごとく、させるべきではないのです。さらには、粗野な英語の語法を持ち込むことから、ラテン語、ギリシア語の語法をまったく崩して、読むと気分が悪くなるほど、野卑なものにしてしまう悪い習性に陥る。これは、洗練された文体の作家の作品に十分に持続的に順序正しく親しみ、よく消化⁽²⁵⁾しなければ避けられないことなのですが、連中は味わうことはほとんどしない⁽²⁶⁾。そうではなく、規則の語形変化表によって、言語の初歩の基本をある程度記憶させた後には、簡潔で精選された教科書を使用して、これらを徹底的に教えて実際の訓練をさせるならば、かれらは直ちに優れたものの本質と諸学問⁽²⁷⁾とを正しい順序で学び得るようになり、しかも、語学がことごとく、すぐにも自分のものとなるでしょう。これこそが外国語を習得するときの最も合理的で、最も有益な方法であると私は考えます。そして、こうすることによって、青年期をこれ〔語学の学習〕に使わせたことについて我々は神様への弁明ができると、期待してもよいと思います。

それから、一般にみられる教養教育の方法について、大学では、野蛮な時代のスコラ学派的粗雑さ⁽²⁸⁾からいまだに十分に立ち直っておらず、古くからの過ちを犯していると、私は考えていますが、それは、最もやさしい学問（それは人間の感覚にとって最もわかりやすい学問⁽²⁹⁾でもある）から始めるのではなく、若く未熟な、手ほどきも受けていない全くの新参者の前に、いきなり、論理学⁽³⁰⁾や形而上学⁽³¹⁾などの最も知的な抽象論を示しているのです。その結果、嘆かわしいほどの構文とともにほんのわずかの単語を身につけようと、文法の平州浅瀬にやみくもにしがみついていたのが、そこから今やっ

と離れたばかりなのに、急に別の気候帯に連れて来られ、底荷〔バラスト〕も積まないあぶなっかしい頭で、底なしのやかましい論争という深海に揉まれ、揺さぶられ、優れた価値のある楽しい喜びに満ちた知識を期待していたのに、ひからびた観念やたわごちに嘲られ欺かれることばかりで、たいていの者は学問を嫌悪し、軽蔑するようになってしまう。ついには貧しさや若さのゆえに、まだその時でもないのに脇道へと誘われ、友人どもに引きずられるまま、出世の野心と欲得だけの神学か、あるいは熱心ばかりで無智な神学⁽³²⁾へ向かう。またある者どもは法律商売⁽³³⁾に心を引かれて、まったく教わったこともないものだから、正義と公正⁽³⁴⁾に思慮深く敬虔に思いをめぐらし、その上にみずからの目標を据えるのではなく、訴訟期間、実入りのよい訴訟、多額の手数料などへの思惑に期待と喜びを置いてしまう。またある者どもは国事に赴くのではあるが、その魂が美德にも真の気高い教育にもそれほど教化されていないので、追従や宮廷の駆け引き⁽³⁵⁾や独善的なもの言いこそ最高の智慧とってしまう。その不毛な心に義務としての奴隸的根性を吹き込まれてしまう（私は、それが見せかけであってほしいと思うのですが）。最後に、もっと溺れやすく浮かれやすいその他の連中たるや、（他には有益なことも知らないために）退いて安楽と贅沢に耽り、歓楽や宴会騒ぎで生きてゆく。もっとも、上に述べてきたうちで（もっと真面目にそれらが行なわれないのなら）、まだしも、最後のものが一番賢明かつ安全な道であります。そして、これらが言葉に過ぎないものとか、勉強しないほうが⁽³⁶⁾むしろよかったことを教えてくれる学校や大学で、貴重な青春の盛りを空費していることの結果なのです。

なすべきでないことをこれ以上並べてあなたを長く引きとめることはやめ、すぐに山腹へとお連れし、徳に満ちた気高い教育に至る正しい道を指し示すことにいたしましょう。初めの登りこそ確かにきついことですが、その他はとてもなだらかで、緑豊かで、よい景色に満ちて、どこも妙なる調べに満ちているので⁽³⁷⁾、オルペウス⁽³⁸⁾の立琴でもこれほど魅力的ではなかったほどです。切株同然の、鈍くてなまくらな若者たちでも、こういう味わいのある教育⁽³⁹⁾ならば、是非とも受けたいと限らない願いで群がって集まるだろうが、かれらを追い払うほうが、はるかに困難であろう。私たちが今やっていることだが、わが国生え抜きの有望な若者たちを引っ立て引きずるなどして、野ゲシやイバラなどロボの餌なみの食卓へ連れて来て、これこそ、最も繊細かつすなおな年齢の生徒にふさわしい食事であると押しついたりするよりは。それゆえに、私は、私的であれ公的であれ、平時にあれ戦時にあれ、すべての職務を正しく、巧みに、気高く行なう⁽⁴⁰⁾ように人を訓練するものを、完全至高⁽⁴¹⁾の教育であると呼びます⁽⁴²⁾。そして、このすべてを、12歳から21歳まで⁽⁴³⁾の、現在全く無意味に文法学や詭弁術に割かれているよりもっと短い期間で、どのようになし得るかは以下の順序になります。

第一に、学校⁽⁴⁴⁾にふさわしく、ゆったりとした建物とそれを囲む敷地とを見つけること。150名を収容できる大きさが適当であり、そのうち約20名は付き添い人とする。全体は一人の統率する者の下に置かれ、その人は、ふさわしい資質があり、すべてを行ない、あるいは、すべてが行なわれるように指示し監督する能力があるとみなされる人でなければならない。ここは学校と大学の両方を同時に兼ねるべきで、他の教育施設へ移る必要はないものとする。学生が開業するつもりの方学、医学などの特殊の学部⁽⁴⁵⁾の場合は別として。リリー〔のラテン語文法書〕⁽⁴⁶⁾から始めて、いわゆる修士⁽⁴⁷⁾

の学位授与に至るまでの期間を占める一般教養科目に関しては、ここで完成するべきである。この型にならって、全国の各都市に、必要とされるだけの数の建物をこのために転用する⁽⁴⁸⁾。これで、至る所で学問と教養の振興を大いに促すことになるであろう。多少の増減はあっても、この人数 [150名] の集団は、歩兵一箇中隊⁽⁴⁹⁾か、同じことだが騎兵二箇中隊に見合うように集められたもので、その日課⁽⁵⁰⁾は学習、体育、食事の三部分に整然と分けられるべきであります。

学習⁽⁵¹⁾に関しては、第一に、現在使用中のものでも、もっと良い教科書でもかまわないが、すぐれた [ラテン語の] 文法書⁽⁵²⁾で、基本かつ必要な規則⁽⁵³⁾から始めるべきである。これと並行して、話す技能は、歯切れよくはっきりと発音する⁽⁵⁴⁾よう習慣づけるべきである。特に母音の場合に、できるだけイタリア人の発音に近くなるように。というのは、我々英国人は、はるかな北国に住んでいるため、冷たい空気の中で南国の言語が優美に発音できるほど大きくは、口を開かない。そのため、外国のすべての国民から、過度に口をあけないで、内にこもった話し方をすると見られている。ラテン語を英語の口の形で間違えて発音するのは、法律用フランス語⁽⁵⁵⁾を聞くのと同様に聞きづらいものです。次には、文法の最も役に立つ要点に熟達させるためにと、かつ、生徒たちが甘い誘惑やつまらぬ考えて道を踏みはずしてしまう前のことですが、生徒たちを教育して早くから美德と真の労働⁽⁵⁶⁾を愛するようにしむけるために、何かやさしくて楽しい教育的な本を [ラテン語訳で] 読んでやるのがいいでしょう。ギリシア人の作品には、ケベース⁽⁵⁷⁾やプルータルコス⁽⁵⁸⁾のもの、その他のソークラテース的対話篇⁽⁵⁹⁾など多くあるが、ラテン語では、かろうじて、クインティリアーヌス⁽⁶⁰⁾の著作の初めの二、三巻と、その他のいくつかの抜粋集以外には、古典的権威のあるものは現存していない。

しかし、ここ [の段階] での、主要な技能学習と基礎固めは、学問への熱意と美德の賞賛の念に燃えて、自発的な服従の気持ちに生徒たちを導き入れてやるように、講義や解説⁽⁶¹⁾を機会あるごとに行なうこと、すなわち、勇気ある者、立派な愛国者⁽⁶²⁾、神に愛され、永遠に有名になりたいという高い希望で奮い立たせることなのです。そうして、かれらが、幼稚で、しつけの悪い、みずからの性質を軽蔑し、男らしく紳士⁽⁶³⁾的な訓練を喜ぶようになるためであります。それは生徒たちの心をとらえるに足る技術と適切な雄弁を備えた人ならば、おだやかで効果のある説得によって、また必要な場合には、それとなく恐怖心⁽⁶⁴⁾を与える暗示によって、しかし、主としてはその教師みずからの模範⁽⁶⁵⁾によって、わずかの期間で生徒たちを信じ難いほどの勤勉と勇気とに導くことができるであろうし、若者の胸に純粹で高貴な熱意を注いで、それは間違いなく、生徒の多くを名高く比類ない人物に育て上げることであろう。それ [語学や購読] と同時に、一日のうちの別の時間帯に、算術の法則を学ばせ、そのすぐ後で、古人の方法のように、遊びごと⁽⁶⁶⁾をしながらでも、幾何学の初歩を学ばせる⁽⁶⁷⁾。夕食後から就寝時刻までは、宗教についてのやさしい基礎知識と聖書の物語を考えさせる時間にあてるのが最善である。

次の段階⁽⁶⁸⁾では、カトー⁽⁶⁹⁾、ワルロー⁽⁷⁰⁾、コルメルラ⁽⁷¹⁾など農業に関する著作家に進む。内容が最もやさしい⁽⁷²⁾からである。語学的にむつかしければなおさら良い⁽⁷³⁾が、この年齢より上級のむつかしきではない。さらにここで機会をとらえて、将来自国の耕作状態を改善し、悪い土壌を回

復し、荒廢の土地を改良するようかれらの心を励ましてその能力を与えてやることです。これは「ギリシア神話の」ヘーラクレースの偉業⁽⁷⁴⁾の一つでありますから。これらの著作の半分を読み終える前には（精読を日課とすることで、すぐに読み終えてしまうであろうが）、必ずどのような普通のラテン語散文でも読める⁽⁷⁵⁾ ようになっているはずである。そして今度は、現代の著作者のもの⁽⁷⁶⁾でも、地球儀と天体儀⁽⁷⁷⁾、さらにすべての地図の使用法を学んでよい時期となる。地図は、まず、古い地名のものを用い、次には新しい地名のものを用いる⁽⁷⁸⁾。あるいは、この頃には、簡潔な自然哲学⁽⁷⁹⁾の手引き書を読むのも可能であろう。

そしてこれと同時に、先にラテン語学習の場合に述べたのと同じ方法に従って、ギリシア語⁽⁸⁰⁾に取りかかってもよいであろう。この方法によれば、文法についての困難な事項はすぐに克服され、アリストテレス⁽⁸¹⁾やテオプラストス⁽⁸²⁾の系統的な自然〔動植物〕学⁽⁸³⁾の全体が開かれて参照できると言ってもよいでありましょう。同様にして、ウイトルーウィウス⁽⁸⁴⁾、セネカ⁽⁸⁵⁾の『自然問答』、メーラ⁽⁸⁶⁾、ケルスス⁽⁸⁷⁾、プリーニウス⁽⁸⁸⁾、あるいはソーリーヌス⁽⁸⁹⁾の著作に進む。こうして、算術、幾何学⁽⁹⁰⁾、天文学⁽⁹¹⁾、地理学の原理と、合わせて自然科学⁽⁹²⁾の概論を済ませた後に、さらに分かれて⁽⁹³⁾、数学では三角法⁽⁹⁴⁾のような計器研究へ移り、さらにそこから、築城学、建築学、軍事土木学、航海学へと進むことができる。そして自然哲学⁽⁹⁵⁾では、気象学、鉱物学、植物学、動物学から解剖学に至るまで、系統的に進むことができる。

それからまた、次の順序として、だれか退屈ではない著者の書物によって、体質⁽⁹⁶⁾、体液⁽⁹⁷⁾、季節⁽⁹⁸⁾および消化不良の処置法を知るために医学⁽⁹⁹⁾の初歩が講義されるとよい。この処置を賢明かつ適時にできる者は、自分自身と友人のためばかりでなく、優れた医者であり、この簡便で費用のかからない方法だけで、いつの日にか、軍隊をも救うことができる。この訓練が欠けているがために、自分の指導のもとにある若者たちの健康かつ元気な肉体を消耗させてはならない。それはまことになげかわしく、指揮者の恥に他なりません。自然研究と数学に関するこれらの全課程を進めるに当って、必要の生じるたびに、狩猟家、鳥獵家、漁師、羊飼、庭師、薬剤師など⁽¹⁰⁰⁾専門家の経験から学ぶのに何の差しさわりがあるろう。科学の別の分野では、建築家、技師、船員、解剖学者たち⁽¹⁰¹⁾。これら専門家たちは、あるものは謝礼を望んで、またあるものはこういう有望な学校を支持して、喜んで役に立ってくれるだろう。これによって、生徒たちは自然に関する知識⁽¹⁰²⁾が生きいきとした色合いを帯びるため、決して忘れることなく、日増しに喜びをもって増進するのである。さらにまた、今では極めて難解であると思われる詩人たち⁽¹⁰³⁾、オルペウス⁽¹⁰⁴⁾、ヘーシオドス⁽¹⁰⁵⁾、テオクリトス⁽¹⁰⁶⁾、アラートス⁽¹⁰⁷⁾、ニーカンドロス⁽¹⁰⁸⁾、オッピアーノス⁽¹⁰⁹⁾、ディオニューシオス⁽¹¹⁰⁾、また、ラテン語のものでは、ルクレーティウス⁽¹¹¹⁾、マーニーリウス⁽¹¹²⁾、それにウェルギリウス⁽¹¹³⁾の田園生活の部分⁽¹¹⁴⁾なども、容易にかつ楽しく読めるようになるだろう。

この「課程を終了する」頃⁽¹¹⁵⁾までには、幾年かの好ましい広い分野の教程によって、倫理学で「正邪選択」と呼ばれる⁽¹¹⁶⁾理性の働きが、より明確に備わっているために、道徳的な善悪について、分

別をもって思慮できるようになっている。そこで、かれらを正しく堅実に立たせるために、特に絶え間ない健全な教化⁽¹¹⁷⁾の手をゆるめず、美德⁽¹¹⁸⁾を知り、悪徳を憎むことを、より十分に教えることが求められてくる。同時に、若くてしなやかな心を導いて、プラトーン⁽¹¹⁹⁾、クセノポーン⁽¹²⁰⁾、キケロー⁽¹²¹⁾、プルータルコス⁽¹²²⁾、[ディオゲネース]・ラーエルティオス⁽¹²³⁾、そしてロクリ[のティーマイオス]の断片⁽¹²⁴⁾などの道徳的な書物を通らせる。しかも、日課の勉学を閉じる夜間の学習では、いつも、ダビデ、ソロモン、あるいは福音書と使徒たちの残したもの⁽¹²⁵⁾などの確固たる明言へと戻らせる。個人の義務についての知識を完全に身につけたのちには、次に[他者への義務である]家計管理⁽¹²⁶⁾について学び始めるのがよい。そして、この時期か、あるいはこの少し前の時期には、かれらは余暇においてイタリア語を容易に習得して⁽¹²⁷⁾いるであろう。そして、そのすぐ後で、しかし用心と矯正とをほどこしながら、ギリシア語、ラテン語、あるいはイタリア語の精選された喜劇作品⁽¹²⁸⁾を味わわせるのは有益であろう。また、家庭問題を扱っている悲劇、[ソポクレス作の]『トラーキースの女たち』、[エウリーピデース作の]『アルケースティス』および同類のもの⁽¹²⁹⁾も。

次の段階は[国家と関係する]政治⁽¹³⁰⁾についての学習に進まねばならない。市民社会の始まり、目標、およびその事情を知るためである。それにより、たとえ共和国の危機的状況に際しても、最近の我国のお偉い議員たちの多くが露呈したような、良心がふらつき、哀れにぐらついて不安定な輩のようなものではなく、確固とした国家の柱石⁽¹³¹⁾となることができるためである。この後には、法律学の基礎と法的正義⁽¹³²⁾についての学習に入ってゆくことになる。最初に、しかも最高の権威をもってモーセ⁽¹³³⁾から与えられたものから、人間の慎重なる智慧に信頼し得る限りでは、リュクルゴス⁽¹³⁴⁾、ソローン⁽¹³⁵⁾、ザレウコス⁽¹³⁶⁾、カロンダース⁽¹³⁷⁾などのギリシアの立法家たちの残した伝承⁽¹³⁸⁾、それから、ローマ帝国時代のすべての告示⁽¹³⁹⁾と[十二]表法⁽¹⁴⁰⁾、合わせてユスティニアヌス法典⁽¹⁴¹⁾へと進み、さらには、サクソン時代以来の英国の判例法、そして成文法にまで至る。

毎日曜日⁽¹⁴²⁾も同じく、平日の夕刻は、今や、神学の最高の問題⁽¹⁴³⁾と古代および近代の教会史の勉強に過ごすのが賢明であろう。そして、その時期までには、[イタリア語とは異なって]定められた時間でヘブライ語を修得⁽¹⁴⁴⁾しているなら、もう聖書を原語で読める⁽¹⁴⁵⁾ようになっているだろう。これに、カルデア語⁽¹⁴⁶⁾とシリア語⁽¹⁴⁷⁾のような言語を加えるのも不可能ではないだろう。これらの学業がすべて十分に克服できたときに、初めて、精選された歴史書⁽¹⁴⁸⁾と叙事詩作品⁽¹⁴⁹⁾と最も気高く荘厳な主題⁽¹⁵⁰⁾を扱うアッティカ語の[ギリシア]悲劇作品⁽¹⁵¹⁾が、すべての有名な政治演説と共に与えられる。これらの演説を、単に読むのみならず、そのうちのいくつかを暗記して、教えられたとおりに正しいアクセントと優美な調子でおごそかに発音する⁽¹⁵²⁾ならば、デーモステネース⁽¹⁵³⁾、キケロー⁽¹⁵⁴⁾、エウリーピデース⁽¹⁵⁵⁾、ソポクレス⁽¹⁵⁶⁾などの力強い精神と活力が生徒たちに賦与されるであろう。

そして、今や⁽¹⁵⁷⁾最終段階として、生徒たちと共に、明晰に、高雅に、そして荘重、中庸、繊細⁽¹⁵⁸⁾のそれぞれにふさわしい文体様式に応じて、語り、書く能力を与えるあの機能的な技法⁽¹⁵⁹⁾を[文学

作品から] 読むべき時期となる⁽¹⁶⁰⁾。それゆえに、役に立つのであるかぎり、論理学⁽¹⁶¹⁾は、ここ [での学習課程] でその正当な場所を与えられるべきで、巧みに配列された論理学の題目や題材⁽¹⁶²⁾が、ついに、その閉じた拳を開いて⁽¹⁶³⁾、プラトーン⁽¹⁶⁴⁾、アリストテレース⁽¹⁶⁵⁾、[デーメトリオス]・ファレレウス⁽¹⁶⁶⁾、キケロー⁽¹⁶⁷⁾、ヘルモゲネース⁽¹⁶⁸⁾、ロンギーヌス⁽¹⁶⁹⁾の規範から教えられて、優美に飾られた修辞学へと至る。この次には詩 [の研究] が続くことになるが、詩は細心精緻⁽¹⁷⁰⁾の点では劣るけれども、より直接的、感覚的、熱情的⁽¹⁷¹⁾であるから、むしろ実際は、これが [修辞学よりも] 先になるべきかも知れない。ここでは、詩の韻律法のことを私は意味しているのではなく、それは、すでに初級文法⁽¹⁷²⁾の段階で出合っているはずであるから。そうではなく、アリストテレースの『詩学』⁽¹⁷³⁾に、ホラーティウス⁽¹⁷⁴⁾に、そしてカステルヴェトロ⁽¹⁷⁶⁾、タッソー⁽¹⁷⁷⁾、マッツォーニ⁽¹⁷⁸⁾その他のイタリア人の評釈書に述べてある、真の叙事詩、劇詩、抒情詩⁽¹⁷⁹⁾の規則とは何であるか、適格⁽¹⁸⁰⁾とは何であるか、見るべき重要な点⁽¹⁸¹⁾は何であるかを教えている、あの崇高な技法のことである。これによって、我が国のふつうの韻文作りや芝居作者の連中⁽¹⁸²⁾が、どんなに軽蔑すべき者たちであるかが直ちにわかるだろう⁽¹⁸³⁾し、詩というものが、神のことに人間のことにも、どんなに宗教的に、どんなに輝かしく、壮麗に用いられるかを知ることだろう。

この時期になってから、こうしてものごとを広い視野で見抜く洞察力⁽¹⁸⁴⁾が身に付くようになって初めて、あらゆるすぐれた内容について書いたり作詩したりできる有能な作者となるように、生徒たちを養成するのにちょうどよい時期⁽¹⁸⁵⁾に到達する。たとえ議会でも委員会でも⁽¹⁸⁶⁾、かれらが話すとなると、その唇に尊敬と注目が集まるであろう。そうなれば、今、我々は、説教者たちの説いて聞かせる、どんな忍耐にも劣らない厳しい忍耐力を試されながら、その足下に坐っているのであるが、そんな場合とは異なる顔つき、異なる身振り、異なる内容の説教者が現れて、説教壇の様子も変わるだろう⁽¹⁸⁷⁾。以上のことが、我が国の良い家柄の紳士的な若者たち⁽¹⁸⁸⁾が、十二歳から二十一歳まで⁽¹⁸⁹⁾の時間を割いて、勉強錬磨しなければならない学問の内容である。かれらが生きている自分よりも死んでいる先祖に頼らない限りのこととして。こういう順序正しい課程にあつては、着実に学習の歩調をとりつつ、一步一步と前進することが要求され、適当な時期には、記憶のために中陣に戻り、ときには、教えられたことを復習するため後陣にまで帰る⁽¹⁹⁰⁾。そして、ついには、ローマ帝国軍団が最後に陣容を整えるように、知識の全体が固く結びついて欠けたところがないように確認しておかなくてはならない。さて、次には、どのような体育と娯楽が、以上述べた勉強に最もふさわしく、適しているものかを見ることにしたい。

(体育)

これまで簡略に述べてきた学習課程は、私が読書してきたところから判断しますと、ピュータゴラス⁽¹⁹¹⁾、プラトーン⁽¹⁹²⁾、イーソクラテース⁽¹⁹³⁾、アリストテレース⁽¹⁹⁴⁾その他による古代の有名な学校に非常に近いものであります。これらの学校からギリシア、イタリア、アジアにまたがって、数多くの高名な哲学者、雄弁家、歴史家、詩人、君主が輩出し、また、[北アフリカの] キューレーネ⁽¹⁹⁵⁾

とアレクサンドリア⁽¹⁹⁶⁾で栄えた学問研究が育ったのである。しかし、ここで私の述べている学校は以上の学校にまさり、かつ、プラトーンがスパルタ共和国について指摘した⁽¹⁹⁷⁾大きな欠点を補うもので、かの〔スパルタ〕市は、その若者たちを主として戦争のために訓練し、また、アカデーメイア⁽¹⁹⁸⁾、リュケイオン⁽¹⁹⁹⁾では、もっぱら、平和のための教育⁽²⁰⁰⁾を行なったのに対して、私がここで描いている教育機関は、平時と戦時の両方に同等に⁽²⁰¹⁾役に立つものです。それゆえ、昼食前の約一時間半は、体育とその後の十分な休息に当てられるべきである。ただし、このための時間は、朝の起床時刻の早さに応じて適宜延長してもよい。

私が第一にすすめる体育は、剣の正確な使い方⁽²⁰²⁾、すなわち防御すること、また剣の刃とか剣先によって安全に攻撃すること、である。これ〔フェンシング〕は、生徒を健康に、敏捷に、力強く、息切れをしなくするのであって、また、これは、生徒を大柄で長身にするために、かつ勇敢で恐れを知らぬ勇気を吹き込むために最も適した方法でもあるのです。時に応じ、真の強さと忍耐力を訓戒し、教化することで⁽²⁰³⁾これと調和させるならば、生来の英雄的な勇気に高まって、悪事を行なうような臆病を憎むようになる。生徒たちはまた、英国人の得意とされていたレスリング⁽²⁰⁴⁾のいろいろな固めわざ、締めわざにも熟達していなければならない。戦いでは、引いたり、組み合ったり、組み伏せる必要が、度々あるのだから。そして、おそらく、これで十分に各個人のもつ強さを試し、発揮させることができよう。

規則正しい〔体育の授業の〕合間の一休みしている時間や、食事前の休憩時間とかに、荘重で神々しい音楽の調和音⁽²⁰⁵⁾を聞いたり、〔楽器の演奏方法を〕学んだりして、疲労した気持ちを休ませ、静めるのは有益でもあり、楽しくもある。その場合には、巧みなオルガン奏者⁽²⁰⁶⁾が、崇高なフーガ形式⁽²⁰⁷⁾で、おごそかな想いにまかせた前奏曲⁽²⁰⁸⁾を奏するか、あるいは、全体の合奏⁽²⁰⁹⁾で、すぐれた作曲家の苦心の和音に巧みな即興的な効果をつけて、美しさを添える。ときには、リユートとか、柔らかなオルガン・ストップが、宗教、軍隊、世俗を歌う優雅な歌声に伴奏をつける。賢者⁽²¹⁰⁾、預言者たちの言葉に誤りないとすれば、これは、人間の気質や振る舞いに強く作用して、野卑な粗雑さと乱れた情念を静めておだやかにする。同様のことは、食事の後においても、消化の第一段階⁽²¹¹⁾での身体的作用を助け、容易にし、調子を整え、満足して再び学習に向かわせるのに不適當ではないであろう。夕食⁽²¹²⁾の約二時間前まで、見開いた目で学習したところで、突然の合図か合い言葉によって軍事教練⁽²¹³⁾に召集される。かつてローマ人が行なったように、季節によって、戸外か屋内にする。最初は徒歩で、それから、年齢に応じて騎馬に進み、すべての騎兵術を学ぶに至る。これは、楽しみながらではあっても、厳格に行なわれ、しかも連日呼集がかかり、布陣、行軍、野営、築城、包囲および砲撃などの全技術にわたる兵士としての基本を修めるならば、加えて、古代、近代の戦略、戦術⁽²¹⁴⁾、戦訓の教えも知るならば、いわば長期の戦争を経てきたかのように、有名な百戦錬磨の指揮官⁽²¹⁵⁾となって、祖国に奉仕できるであろう。そうなれば、かれらは、すばらしい精鋭をゆだねられているのに、しかるべき賢明な規律がないばかりに、それほど度々補充困難な精鋭が、病気で抜ける羽根のごとく、落伍してしまう⁽²¹⁶⁾などさせないだろう。また、無能で新兵も募ることができないで、一中隊わずか二十名

(217) の兵の上に立つ士官たち(218)が、欠員分および哀れな現員分の賃金(219)を飲んでしまったり、ひそかな退蔵場所に横流ししたりしているうちに、かろうじて残っている二、三十名の飲んだくれ兵士のなすがままになったり、略奪や暴行にくみしたりする、そういうことを許さないであろう。たしかに、生徒たちが、正しい人間、正しい指導者に備わっているあの知識をいくらかでもわきまえているならば、このような行為は決してさせないであろう。

さて、話題を私たちの学校に戻します。学内での不断の体育訓練の他に、戸外での楽しみから体験を得るもう一つの機会がある。大気が穏やかですがすがしい春の季節などに、戸外へ出ていかないこと、自然の豊かさを見ず、自然の喜びを天地とともに分かち合わないことは、自然に対する冒瀆であり、悪意であろう(220)。それゆえ、二、三年して学問の基礎がしっかりと固まったのちには、私は、過度の詰め込み勉強を奨励はせず、賢明でしっかりした案内人と同伴で、国内のあらゆる地方へ出かけることをすすめたい。いろいろな有力な場所、都市の建物、農耕の土壌、貿易の停泊所と港などのいろいろな施設を学んだり、視察することをすすめたい。ときには海に出て我が艦隊を訪れて、航海や海戦の実地の知識もできるだけ学ぶようにする。

こうした学習方法は、天与独自の素質を試し、もし、その中に特に優れた素質が潜んでいれば、これを引き出してこれを伸ばす好機会を与えてやることになるだろう(221)。それは、必ずこの国の国益に大きく寄与せずにはおかず、古来から賞賛されてきたあの美德と卓越とを、今、純粋なキリスト教の知識による優位に立って、再び世に行なわしめるに至るだろう(222)。そうなれば、パリの旦那連中に我が国の有望な若者たちを預けて、低俗でぜいたくな庇護を受けさせ、人まね(223)、猿まね、軽薄者に変えられて、再び送り返してもらい必要もなくなるのである。しかし、もしもかれらが二十三か二十四歳の年齢(224)で、いまさら原理を学ぶためではなく、経験を広げて観察をするために外国を見聞したいと思うのなら(225)、かれらは、その頃までには、どこを旅しても、あらゆる人々の尊敬と名誉を受け、また、至る所で、その土地の最も優れて卓越した人々との交際、交友にあずかるにふさわしいほどの人物になっていることであろう(226)。そうなれば、おそらく、よその国々の人々のほうが教育を受けるため、進んで我が国を訪れるだろうし、あるいは、自国で私たちを模倣するようになるでしょう。

さて、最後に、食事について言うべきことはあまりありませんが、ただ、同一の施設内で取るのが最善です。外で食事すれば、それだけ時間が無駄になるし、いろいろと悪い習慣がつくからです。そして、食事は、質素で健康によく、適量であるべきことは論ずるまでもないと思います。ハートリブ様、以上のように、ご希望に従って、教育の最善かつ最も高貴な方法に関して数回あなた様と語り合ったことについての総括的な見解を文書にいたしました。他の人たちのように揺りかごの幼少期(227)から始めることはしませんでした。簡略を意図としたのでなかったならば、その問題も大いなる考慮に値することであつたでしょう。他にも多く言及し得たことがらもあつたはずですが、試みようとするほどの人々であれば、[導きの]光と指針のためにはこれで十分であると思います(228)。ただ、私の思うところでは、この[教育論]は教師を自任する人なら誰でもが引けるという弓ではなく、ホメーロスがオデュッセウ

スに与えた筋力に並ぶほどの筋力を必要とするであります (229)。それにもかかわらず、なお、これを実際に試みるならば、はるかな遠くから眺めてそう見えるよりはもっと容易で、もっとわかりやすいことになる、私は確信しています。ともあれ、それは、私が想像するほど大きな困難を呈することはなく、その想像によると、そこに示されているのは望み得る限り、幸福で可能性のある姿以外の何ものでもありません。もし神がそのようにお定めになり、この時代がそれを理解し得る精神と能力を有しているならばですが。

【訳 注】

(1) この翻訳に際しては、Ernest Sirluck, ed.; *Complete Prose works of John Milton*, Volume Two (Yale University Press, 1959) に所収の *Of Education. To Master Samuel Hartlib* を底本にした (pp. 362-415)。

なお、訳文中の区切りについては、当時の文章の常として、原文のままでは長大な、わずかの8パラグラフ構成で書かれており、理解しにくいと判断した。そのため、他の文献も参照して、原文よりも多く区切られて示されている。すべて分かりやすさを目指したことによるものである。

(2) サミュエル・ハートリブ Samuel Hartlib (?1600—1662)。

プロシア Prussia 生れの商人、教育改革家。父親はポーランド人、母親は英国人。1625年と1626年にケンブリッジ大学に学ぶ。のち、故郷のエルビング Elbing で牧師の職にあったジョン・ダーリー John Durie のすすめで1628年までには英国ロンドンに戻って商人となっている。1630年チチェスター Chichester に教育改革を目指す学校を設立したが経営に失敗した。

このハートリブは、当時ヨーロッパ大陸で教育改革者、教育思想家として名高い、チェコ出身のヨハン・アモス・コメニウス Johann Amos Comenius (1592-1670) の信奉者で、1641年9月から翌1642年6月までの間、コメニウスを英国に招いて教育改革の運動をすすめた。さらに、文芸から自然科学におよぶ広範囲の知識を授ける目的の大学を設立しようとしたが、政情不安のために中止せざるをえなかった。

ハートリブがミルトンと親交を結ぶようになったのは1643年頃で、おそらく、ミルトンの家庭教師であったトマス・ヤング Thomas Young を通してのことであった。オールダズギットのミルトンの家で、あるときは、デュークス・プレイスのハートリブの家で、二人はしばしば会合して、様々な話題、とくに、ミルトンが当時従事していた私塾での指導のことをもまじえた教育について語り合ったと思われる。そのような話し合いから、ミルトンの言葉を借りれば、「偶然にも知り合うに至った我々の会話を通じて」ハートリブは、ミルトンにまとまった「教育論」を書くように「切羽詰まって、ほとんど無理矢理に要請」したのであろう。

なお、コメニウスは近代教育学、とくに教授学の祖と言われる人物である。ドイツの大学で神学を学び、帰国してフス派の流れをくむボヘミア兄弟団の聖職者となり、のちに指導者となる。三十年戦争でドイツ皇帝軍に制圧されたボヘミアから亡命し、生涯ヨーロッパ各地を流浪した。亡命初期に刊行した『語学入門』(開かれた言語の扉 *Janua linguarum reserata*, 1631) などで主として言語教育の革新者と

して高名になる。英国ではその来訪を機にロイヤル・ソサイエティ Royal Society 設立の議論が始まり、のちにはベルリン科学アカデミーも設立された。ライプニッツ Leibnitz もコメニウスの影響を受け、アメリカ人のウィンスロップ Winthrop はハーヴァード大学学長職への就任を彼に要請したとされる。

コメニウスの教育思想の背景には、世界を神における一大調和とみる世界観、知を通して徳から信仰に至るという認識論を含む神学があり、その観点から彼は、すべての国の男女が同一の言語によって、学問のあらゆる分野を統合した普遍的知識の体系（汎智学）を学ぶ必要を説いた。主著にラテン語の『大教授学』（*Didactica magna*, 1657）がある。

(3) 後年になってミルトンは『英国民のための第二弁護論』（*A Second Defence of the English People*, 1654）において、『教育論』執筆の事情を述べるとともに、共和国を治め、それを持続させるのに、教育が重要であることを力説している。

(4) 当時のミルトンは、1643年8月、『離婚の教理と規律』（*The Doctrine and Discipline of Divorce*）を発売し、翌1644年2月にはその増補版を、7月には『マーティン・ブーサーの離婚思想』（*The Judgement of Martin Bucer concerning Divorce*, 1644）を出版している。

1644年6月5日出版の、この『教育論』は、これら一連の「離婚」の「大義」追求の最中に執筆されたものである。

(5) サミュエル・ハートリブを指すと解釈する。

(6) 1641年6月15日、英国議会は、司祭長と牧師団から没収した土地を「学問と敬虔の高揚」のために用いるべきことを決議している。

(7) 原文 *Idea* の訳。初版でもイタリック体であった。『オックスフォード英語大辞典』（*OED*）は、『教育論』のこの個所を引用した小項目で「意図」「行動のプラン」などの定義を与えている。

しかしながら、むしろ、大項目にある「原型」「規範」などの方が適当であり、プラトーンの「イデア」の意味が込められていると諸家が指摘している。『教育論』における度々のプラトーンへの言及と、全体を通じてのプラトニズムから、納得のできる解釈といえる。

(8) 「それから、わたしは、小冊子（*pamphlet*）で子どもの教育のことを論じた。それは短いものだったが、この問題に真剣に勤勉に取り組む人にとっては十分な長さであった」（ミルトン著『英国民のための第二弁護論』*A Second Defence of the English People*, 1654）。

(9) 『イングランド宗教改革論』（*Of Reformation in England, and the Causes that hitherto have hindered it*, 1641）において、ミルトンは「高位聖職者たちがもし神の栄光とキリスト教信仰の前進に思いをいたすとすれば、巨額の富を屑入れに投げ捨てる代わりに、その富を使って、教会や学校のないところにそれを建て、その不足が叫ばれるところには増設したらいいのです」と述べている。

また、『英国民のための第二弁護論』の最終部分近くでは、「今までなされてきた以上に、若者たちの教育のより良い準備」をすべきことを、オリヴァー・クロムウェル *Oliver Cromwell* (1595-1658) にすすめている。

(10) コメニウスの著書『語学入門』と『大教授学』などに言及したもの。

『語学入門』は、1631年ポーランドで出版されて以来、各国語に翻訳され、英語版も数多く出たので、ミルトンも当然読んでいたと思われる。『大教授学』の出版は、ずっとのちの1657年であるが、ハー

トリブは、コメニウスからこれの要綱を早く入手していて、そのラテン語版(1628)と英語訳版(1645)とを出版している。

おそらく、コメニウスとは直接面談していないと思われるミルトンは、ハートリブを通して、この著書を知ったのであろう。ミルトンのこのあたりの書きぶりは、コメニウスの教育法を暗に軽視しているようにも受けとれるが、むしろ、自分の教育法が、同時代のさまざまな試みに左右されない独自のものであることを言いたかったのではないか。

(11) ミルトンがケンブリッジ大学を卒業してから、このときまでの12年間。

(12) ここに述べられている学問の目的論は、ミルトンの『教育論』における最も有名な個所である。本質的に宗教的なこの教育の目的は、のちに示される、より現実的な「教育の定義」(訳注(42)を参照)の基礎となるものである。

(13) 「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」(新約聖書「ヨハネの第一の手紙」第3章第二節)。

さらに、『教会政治の根拠』(The Reason of Church-Government Urged against Prelaty, 1642)において、ミルトンは次のように言う。

「神と人間との間に立てうる最も厳格で緊急な契約である福音によって、わたしたちは、いまや、神の子となる資格を得たのだから、神のことを思い、神のようになり、神と一つにされ、御旨のままにこのことを表わし、神と交わりをもつことほど、わたしたちにふさわしいことはない」。

(14) 「それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい」(新約聖書「ペテロの第二の手紙」第1章第五節—第七節)

(15) 『教会政治の根拠』において、ミルトンは、二つの知識を区別している。自然事物、因果関係などの知識と、神に関する知識とである。前者は「対象が低いゆえに低い知恵」であり、後者は「唯一の高く価値ある知恵」である。

『教育論』のこの個所でミルトンは、教育が「目に見える、より程度の低い被造物」の知識から、次に「神と目に見えない事からを知る知識」に進まなければ、人間は低い知恵から高い知恵に到達することができないと主張する。

(16) 『教育論』にはルネサンス期の「新しいナショナリズム」が強く出ていることが指摘されている。すでにミルトンは『教会政治の根拠』において、将来の大作への抱負を、「のちの世の人が死滅させることを潔しとしないほどに書かれた何かを、私は残すであろう」と述べ、すぐそのあとに、「何のものにもまして、祖国の名誉と教育とによる神の栄光が尊重されねばならない」と続けている。

しかし、この『教育論』の計画で、ミルトンのあげているのは、ギリシア、ローマ、パレスチナ、ルネサンス期のイタリアで書かれたものばかりで、英国人の著作は一つもないことに注意。

(17) ミルトンによる、有名な言語についての定義である。これは、決して言語の軽視ではない。言語の本来的な重要性を強調している文脈において、この定義がなされていることに注意すべきである。大切なのは、「知って役立つ事物」を、言語を通じて、しっかりと学びとることである。

若いときのミルトンは、ラテン詩「父に寄す」(“Ad Patrem,” ?1632)の中で、ラテン、ギリシア、フランス、イタリア、ヘブライの各言語の習得を通して、それらの言語がもたらす知識を身に付けたことを、父親に感謝している。

(18)「主は降って来て、人の子らの建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らは町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱(バラル)させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。」(旧約聖書「創世記」第11章第五—第九節、新共同訳による。)

(19) 言語のみを重視して、事物、つまり内容をおろそかにすることをいましめる考え方は、エラスムスやフランシス・ペイコンなどにも見られる。ペイコンは『学問の進歩』(1605)において、次のように言う：

「人間が言葉を学んで、事物を学ばないとき、学問の最初の乱れが来る。(略)言葉は事物の影にすぎない。」

(20) このような批判は、当時の識者の間に強かった。たとえば、トマス・エリオット(Sir Thomas Elyot, ?1490-1546)は、『為政者論』(The Governour, 1531)において述べる：

「文法は、著者を理解するための入門にすぎないのに、それが学び手にとってあまりに期間が長く、あまりに詳細にすぎると、学ぶ意欲を、いわば、殺してしまう。かれが、昔の著者を喜んで楽しく読めるようになるまで、学問への燃えるような欲求の火花が、文法の重荷で早くも消えてしまう」(第1巻第十章)。

(21) ミルトンから教えを受けた甥のエドワード・フィリップスは、ジョン・オーブリー John Aubrey (1626—1697)の「ミルトン覚え書」(Brief Lives, 1681年執筆)の項のために、次のように書いている：

「外国旅行から帰国してのち、ただちにミルトンは、聖ブライズ・チャーチヤードの仕立て屋ラッセル氏宅に居を定め、当時十歳と九歳であった、姉の二人の息子、エドワード・フィリップス Edward Philips とジョン・フィリップス John Philips に勉強を教えた。そうして一年のうちには、二人がラテン語の著作をひと目見てわかるようにさせたし(略)二人は、三年もたたないうちに、ラテン、ギリシアの詩人たちの最上のものをひととおり読了した」。

(22) ミルトンが批判しているのは、正規の休暇ではなくて、講義が休講となる、たとえば、「聖ジョージの日」(4月23日)などのことであろう。聖人の記念日で、教会で記念行事を行うので、学校も休日となる日が多かったらしい。

(23) この当時の文法学校(Grammar School)におけるギリシア・ローマ古典の授業では、生徒の関心は、作品の内容を十分に理解することよりも、その内容が表現されている字句に集中された。生徒は帳面に、古典スタイルの気のきいた例文を集めて、さらに、熟語集とか、模範文集の助けを借りて、子どもじみた作文を作るように教授された。

このような古典語の作文や演説を、もっと後回しにせよというミルトンの主張は、ルネサンス期の文

法学校の教育方法と根本的に対立する。

(24) 原文 invention の訳。古典修辞学において、題材を発見する能力を意味する。さらに、どこに主題を見つけるかの知識、いかに題材が目的にかなうかを認知する知識をも含む。

(25) 「ある書物はその味を試み、ある書物は呑みこみ、そしてある少数の書物はよく咀嚼して消化すべきである」(ペイコン「学問について」“Of Studies”)

(26) 中世の大学科目にいう三学(文法学、論理学、修辞学) Trivia を教えるにあたり、ルネサンス期の英国の学校では、文法学を最優先して、文学作品などは、文法の規則を例証するために用いられるにすぎなかった。

ミルトンは、エラスムス、エリオット、ジョン・コレットなどと同じく、文法の初歩を学んだのちに、ただちに「洗練された文体の著作者」の作品を読ませようとする。以下にあるように、それが、最も合理的で、最も役に立つ言語学習法であるという。

(27) 三学、四科(算術、幾何学、音楽、天文学) Quadrivia からなる、中世のリベラル・アーツ (artes liberales) のことではなく、より広く、「学問一般」を指すと考えるべきであろう。

(28) ミルトンは、大学在学中の課題弁論原稿「スコラ哲学批判」(『雄弁試論』第三、1628年頃)において、次のように言う。

「これらのつまらない脆弁の書をあとづける仕事が、しばらく私に課せられていたとき、あいつぐ読書のために心がにぶり眼がかすんだとき、しばしば、本当にしばしば、私は、読むのをやめて息をつき、退屈からすこしでものがれようと、まだどのくらい仕事が残っているかを見たものだ。そして、いつもそうだったのだが、今まで読み終えたのよりは、はるかにたくさんの本が残っているとわかったとき、私は、こんな愚かなことを強制されるくらいなら、むしろ、アウゲイアース王の牛舎の掃除をやらされた方がよかったのにと、いかにしばしば思ったことか。そして、このような苦役を、やさしい女神ユーノーから決して課せられなかったヘーラクレスの幸運を、いかにしばしば、うらやましく思ったことか」

(29) 訳注(15)を参照。

(30) 「大学の学生たちは、あまりに早く、あまりに未熟なのに、論理学や修辞学に出会う。これらは、子どもや初心者などよりも、学位を得たものによりふさわしい学問であるのに」(ペイコン『学問の進歩』)。

(31) 原文 metaphysicks の訳。ミルトンは、metaphysicks も metaphysical もあまり使用しないが、使用するときは、軽蔑の意味を含めているらしい。ここで、早きにすぎると批判されている論理学と形而上学のうち、論理学は、のちのカリキュラムに登場するが、形而上学は、姿を消してしまう。

(32) ミルトンは、当時の聖職者たちの金銭欲と知的教養の不足とを特に強く批判している(「リシダス」“Lycidas,” 1637, 112—131行を参照)。

(33) ミルトンは、学問としての法律研究とは異なる、職業としての法律には低い評価しか与えていない。ラテン詩「父に寄す」にもそのことがうたわれている。

また[父上は]法律や、しばしば蹂躪される法令に
無理に私を連れていこうとなさったり
それらの愚かしい喧噪で

私の耳を聳しようともなさいません。(“Ad Patrem,” 71—72行。)

(34) のちに、ミルトンが展開する法学のカリキュラムは、文字どおり、「正義と公正」とにもとづくものである。

(35) ミルトンは『偶像破壊者』(Eikonoklastes, 1649)において、王チャールズ一世(Charles I)の議会を無視した行動を非難して、次のように言う：

「宮廷育ちで、たえず追従者どもとつきあったことは、たしかに、悪しき教育の場であったにすぎない」

(36) 「リシダス」の中の「ほかの人々がするように、木かげでアマリリスとたわむれたり、ニーラの髪をもてあそんだりするほうが、ずっと良い生き方ではないのだろうか」(67—69行)に見られるような生活を指すのであろう。

ミルトンは、このような生き方を肯定しているのではなく、誤った教育を受けたのち、聖職者、法律家、政治家となって、まちがった生活を送るよりも、この方が、「まだしも無難」であると言う。

(37) ミルトンは、自分の教育の構想が、決して固苦しいものではなく、喜ばしく、楽しいものであることを象徴的に強調している。

(38) オルペウスはギリシア神話に登場する聖なる音楽家。神アポローンと学芸女神ムーサのカリオペーとの子とされる。神アポローンから学んだ立琴は、鳥獣木石をも動かす力があったという。かれは、音楽と同時に、詩や学問の象徴でもある。

(39) 原文 a happy nurture の訳。『オックスフォード英語大辞典』は、この nurture を「訓練」「教育」の意味としているが、次にある「ロバの餌なみの食卓」との比較で、「楽しい食事」の方が、わかりやすいかもしれない。ここでのミルトンの議論は、当時の教育一般を酷評しながら、自らの教育法を誇示して、面目躍如たるものがある。強制されない、楽しみながら学ぶ早期教育を説いているプラトンの『国家』と同じ主張と見ることができる。

(40) 原文 magnanimously の訳。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(第4巻第三章など)に由来するとの指摘がなされている。

自らの真価を自覚し、正しく評価できる人以外の賞賛にとらわれず、運命の変転に動ぜず、他人を利することには率先するが、みずからは利を求めない態度のこと。

(41) 原文 complete and generous の訳。生まれ、家柄、精神の高貴なこと。この『教育論』は、「わが国の家柄のよい紳士的な若者たち」を「国家の柱石」にふさわしい人材に仕立てようとしている。したがって、この語は「そういう若者たちの教育にふさわしい」ということである。

のちに、王政復古の直前に出版された『教会浄化の方法』(Considerations touching the Likeliest Means to remove Hirelings out of the Church, 1659)、および『自由共和国樹立の要諦』(A Ready and Easy Way to establish a Free Commonwealth, 1660)において、ミルトンが書いている教育計画は、比較的、大衆教育を指向していると言える。

(42) 先の「学問の目的」(訳注(12))に呼応する、ミルトンによる「教育の定義」である。前者では、人間の墮罪を回復し、神を愛し、神にならうという宗教的でしかも基本的な目的が述べられていたのであるが、ここでは、職務をやりとげる人間を訓練するという実際の教育実践が主張されている。前者はヘブライ的、後者はギリシア・ローマ的と言い得るであろう。ミルトンが『教育論』において、多く

の「異教の書」を必読の書物として並べているのは、この教育の定義を証明するためであろう。

(43) 当時の教育では、子どもは7歳から学校へ入り、文法学校7年、学士課程4年、修士課程3年、計14年の教育を受けたのであるが、ミルトンは12歳から始めることによって、初等課程で3年を縮めている。この5年間の内容には触れていない。そして、ミルトンは、以下9年間のカリキュラムを解説していく。

(44) 原文 Academy の訳。プラトーンの学校「アカデーメイア」に由来する。

(45) ミルトンは、法学と医学とをあげて、ことさらに、学問的職業の一つである神学を避けている。大学での神学に対する強い反感のあらわれであろう。

『教会浄化の方法』には、この反感が、次のように強く表現されている。

「人間関係学科でも、神学関係の学科でも、聖職者に必要なのは、どこかの民家で、同じくらい容易に、しかも安上がりで教えることができる。(略) 大学には神学などない方がはるかによいだろうに」

(46) ウィリアム・リリー William Lily (?1468—?1523) が、聖パウロ学校 St. Paul's School で使用するためジョン・コレットとエラスムスとの共編で編纂したラテン語文法学習用の教科書。初版は1513年。ヘンリー八世のときに欽定教科書とされ、ミルトンのときにも広く用いられていた。

聖パウロ学校でミルトンが用いたのは1574年版である。

(47) 原文 Master of Arts の訳。

(48) 一種の国家的教育組織網の提言である。のちにミルトンが、『自由共和国樹立の要諦』の最終部近くで行なった、各部に貴族と主だったジェントリー階級 gentry の子弟のためのグラマー・スクールやアカデミーを設立する提案を予告するものと言える。

しかしながら、この構想を裏付ける政治的、経済的基盤について、ミルトンは触れていない。

(49) 通常、たて10列よこ10列の方陣であったという。

(50) 当時十六、十七世紀における英国の文法学校（全寮制）では、日課としての学業の時間は、午前6時から11時まで、そして昼食時間のあと、午後1時から5時までが普通であった。

(51) ここから第一期が始まる。

(52) ラテン語学習のための文法書のこと。1644年のこの時点で、ミルトンは、後年に出版の『ラテン語文法』(Accidence Commenc' t Grammar, 1669) を計画していたか、それとも、すでに書き終えていたかは不明である。

(53) ミルトンの『ラテン語文法』においては、「あまりに例外が多くて規則の部類に入らないもの」(読者宛てのはしがき, TO THE READER) は省略されて、基本的な規則だけが取り上げられている。

(54) 晩年のミルトンの弟子であったクェーカー教徒のトマス・エルウッド Thomas Ellwood の『自叙伝』(The History of Thomas Ellwood, 1714) によると、1662年、ミルトンはエルウッドのラテン語の発音を矯正したという。

しかし、ミルトンの『ラテン語文法』においては、発音は取り扱われていない。たいていの人々が、英語式発音以外の発音をすることを納得しないからである(“since few will be perswaded to pronounce Latin otherwise then thir own English”, 読者宛てのはしがき, TO THE READER) と、ミルトンは理由を述べている。

(55) 当時でも、まだ、法的文書には方言化されたノルマン・フランス語が用いられていた。

(56) ラテン語文法の初歩といっしょに、道徳や行儀作法を教えるのが、ルネサンス期のイギリスの普通のやり方であった。ミルトンは、文法家が書いたものの抜粋によってではなくて、古典的権威のある本を読んで聞かせることによって、少年を美徳と鍛練とを愛する人間に育てようとする。

(57) ケベースは紀元前三世紀ごろのギリシアの哲学者。ソークラテースの門人で友人。プラトーンの『パイドーン』の中で、知恵を学び、美徳を身に付けるのに熱心な若者として登場する。

著書『ピナクス (表)』はケベースの作でないと言われているが、アレゴリーを用いて人の一生をあらわした道徳的な読みものである。ミルトンは、これのラテン語訳をすすめている。1515年のギリシア語とラテン語の対訳版のほか、多くのラテン語版がルネサンス期の全ヨーロッパで読まれた。

(58) プルータルコス(Plutarchus)は紀元30年ごろ生れのギリシアの哲学者、伝記作家。『英雄伝』が最も知られている。ここでは、『子どもたちの教育について』を指している。友人、家庭教師、学校教師の選び方から自然・理性・習慣の三要素を説き、さらに、訓練、抑制、節制さらに美術におよぶ。1639年の秋以来(少なくとも1647年秋まで)ミルトンから直接教えを受けた、甥エドワード・フィリップスの『ミルトン伝』(1694)には、ミルトンの指導のもとに、フィリップス兄弟をはじめ、塾生たちが勉強したギリシア、ラテンの著者名(ある場合は著書名も)が列挙されている。この中に『子どもたちの教育について』が、ギリシア語の題名で記載されている。ミルトンがここで推しているのは、そのラテン語訳である。1572年、パリで出版の『プルータルコスの道徳説話集』に本書が含まれているほか、部分訳の単行本が流布していたと思われる。

(59) 『プルータルコスの道徳説話集』(訳注(58)参照)のなかでの、プラトーンの『国家』、『法律』から抜粋した対話の部分のことらしい。

(60) クィンティリアーヌス(Quintilianus)はローマ帝政初期(一世紀)の修辞学者、雄弁家。現存する著作に『弁論家教程』がある。1575年のリヨン版では、最初の二巻において、教育の理論、修辞学の教授法、生徒の能力とその扱い方、読書の価値、教師と生徒との関係などについて述べられている。

(61) 「訓戒や解釈を織りこむ」のは、一つには、プラトーンのラテン語訳などのテキストが入手困難の場合、プリントなどで教授する際に必要であることが考えられる。

さらに、ラテン語教育の段階で古典を読んで聞かせ、美徳を愛する人材を育てようとするミルトンの計画における方法論として、次に書かれている「おだやかで効果のある説得」、「恐怖心を与える暗示」、「自らの模範」とともに提出されていることに注意したい。

(62) ミルトンは、算術、幾何の課程の紹介に進む前に、『教育論』が目指す人間像を描く。

すでに明らかにした「学問の目的」と「教育の定義」とを、再度、具体的に確認している。

(63) 原文 liberal の訳。もとは「自由人にふさわしい」の意味で、「奴隷的、職人的」などと対立する語。『オックスフォード英語大辞典』には、1589年の liberal education が引用されている。ミルトンの時代までに、「紳士にふさわしい」仕事、職業をあらわす形容詞となった。

(64) ミルトンは、『教会政治の根拠』の序文において、説得と恐怖心とに関して次のように述べている。「人を服従させるには、恐怖心を与えるよりも、説得による方が、より効果のある、より人間らしい方

法であるから、非常に重要な法律を公布する場合には、その序文のようなかたちで、わかりやすい説明がつけられていなければならない。

(65) 訳注 (61) を参照。

(66) 初歩の算術、幾何学を遊戯をしながら学ばせることは、プラトーンの『法律』、『国家』においても奨励されている。クインティリアヌス(訳注(60))も教育に遊戯を取り入れることを提案している。

しかしながら、エドワード・フィリップスの『ミルトン伝』(訳注(58))を参照)には、数学の勉強のうちにミルトンが遊戯を取り入れたという記述はない。

(67) 教育の構想において、算術、数学を重視することは、この時代にも一般のことであり、ミルトンに限ったことではない。

しかし、ラテン語を学んでいるこんなに早い段階のカリキュラムに入れていること、それをかなり徹底的に勉強させている点で、ミルトンは特別である。

(68) ここからが第二期である(訳注(51))を参照)。そして、農業をはじめとして、「目に見える、より程度の低い披造物」、すなわち、当時の世界観の枠であった「偉大な存在の鎖」の一番低位のものからの研究が開始される。

(69) カトー(前234—149)。ローマの政治家で軍人。その『農業論』は、ラテン語で書かれた最古のもの。

(70) ワルロー(前116—27)。ローマの作家。『農業論』三巻がある。

(71) コルメルラは一世紀のローマの作家。『農業談』十二巻がある。これら、カトー、ワルロー、コルメルラのラテン語の農業論は、ミルトンの時代にも標準的なものとみなされていた。

オーブリーは『ミルトン覚え書』(訳注(21))を参照)の中で、「カトー、ワルロー、コルメルラの農業論が、甥たちが最初に学んだ著作だった」と書いている。

(72) 訳注(15)(68)を参照。

(73) 「問題が最もわかりやすい」学問を表現する言葉が、難しい方がいいと述べるのは、第一期において、ラテン語習得のためのすぐれた言語教育をほどこしたあとであるからこそ、言えるのであろう。

(74) ギリシア神話の英雄ヘーラクレスが、三千頭の雄牛が三十年間閉じこめられていた、アウゲイアス王の牛舎を、アルペイオス川の水を引き入れて、一日で掃除したという話から、ヘーラクレスがイタリアの土壌を肥沃にしたとの伝説が生まれた。

ミルトンは弁論原稿「スコラ哲学批判」において、この故事にかこつけて話を進めている(訳注(28))を参照)。ただし、ミルトンは、この難業を命じたのが女神ユーノーであるとしているが、正しくはヘーラクレスのいとこのエウリュステウスである。

(75) 提唱してきた自身の言語教育の正しさへの自信から、このように言えるのであろう。

(76) 文脈から判断して、ラテン語で書かれた、当時の著作者のものであろう。

(77) 「地球儀と天体儀」は、原文 the Globe の訳。

(78) 地図の使用法を学ぶためには、古典語の地名と当時の地名との両方を知る必要があった。

(79) 原文 natural Philosophy の訳。

(80) 当時の文法学校では、ギリシア語は、主として聖書を原語で読めるようにするために、ラテン語で書かれた文法書で勉強させた。

しかし、『教育論』のカリキュラムでは、この段階(第二期)のギリシア語は「より程度の低い披造物」(訳注(15)(68)を参照)を勉強するため、「神と目に見えない事がら」は、のちの段階に繰り下げられている。

<なお、紙幅の関係で、これに続く訳注は次稿に掲載の予定である。>